



山口調理製菓専門学校長 須内章雅
Sunouchi Akimasa

○ 先生

前回は「教育とは」という始め方で教育学の本質ではない話題を記述してみました。今回も本質ではない「先生と言われるほどの馬鹿でなし。」ということわざを思い出しました。このことわざの解説をするわけではありません。私が「先生」ということばで思い出す二つのことを紹介してみようと思います。あくまでも個人的な出来事の見方ですので、さらっと読み流してください。

私がまだ学校の教員ではなかった若かりし頃、高速道路を運転してサービスエリアで休憩していた時のことです。目の前の駐車スペースに一台の観光貸し切りバスがやってきました。降りてきた乗客は20代から50代くらいで年齢もバラバラでしたが、私は「学校の先生たちだ。」と直感しました。団体名を見るとその通りでした。学校の先生、特に義務教育の先生たちには独特な雰囲気があるように思います。私も教員を目指していたころですが、あの雰囲気は身につけたくないなと思ってしまいました。しかし後年、私の妻から「あなたはまさに学校の先生ね。」というふうに言われてしまいました。悔しいけれど身につけてしまったようです。ちなみにそのサービスエリアは東海地方あたりだったと思います。日本の先生たちは都道府県や地域に関係なく同じような雰囲気をもっているのかな？よい面としての言い訳をしてみます。あの独特な雰囲気は児童生徒の「安心感」ではなからうかと思うのです。

その雰囲気を身につけてしまったであろう40代のころ、私は学校現場ではない教育委員会勤務となりました。いわゆる市役所の職員になったわけです。そこではお互いのことを「さん付け」で呼びます。課長や係長などの役職をつけることもあります。学校現場ではお互いを「〇〇先生」と呼び合います。事務職員の方も子どもの前では先生です。一般社会では身内を紹介するときに敬称などは付けず、いわゆる「呼び捨て」が通常ですね。保護者の前でも「〇〇先生」と遣っていた私はカルチャーショックでした。しかし時間が経つにつれ、そちらの方が自然に思えてきました。逆に学園ドラマなどで教師役の方がお互いを「〇〇先生」と呼んでいる姿に違和感を覚えました。不思議な感覚の変化です。

違う話になります。主に中学生の坊主頭です。だいぶ昔にはほぼ全ての中学生(男子)は坊主頭でした。たまに長髪の男子を見かけると「坊ちゃん」の様な変な違和感を覚えていました。しかし少しして長髪OKの学校に勤め始めると、今度は坊主頭の方に違和感を覚えたのです。どちらがよいか悪いかということではありません。感じ方の変化の不思議さを思い出しているのです。今では教員としてこの体験は貴重なものだったとありがたく思っています。

前回少し紹介した講座の受講生は教師になったばかりかこれからなる人たちです。実感はできないかも知れませんが、ぜひ紹介してみたいことの一つです。調理師や製菓衛生師を目指す人たちにはそれほど重要なことではないかもしれませんが。

余談：昔、どこかの女子高校生が下校しているところに遭遇した時のことです。私の目にはポニーの群れが歩いているように見えました。近くの駅に向かっているのでしょうか。その制服の色はベージュで足下は皆同じように白のルーズソックスです。髪型も皆同じという状況でした。 前文との関係は？

○ 自校自賛

何日ぶりかで実習を参観しました。いつも美味しそうに仕上がっています。右の写真は西洋料理「サーモンのボンファム」です。私は食べたことがなかったですね。

今回の植物：ムラサキシキブ(紫式部)

紫色の小さな丸い実をつけるシソ科の落葉低木です。学校花壇の“抜きそうになった木”に実りました。

